

新井白石と斬新な視野の拡大

— 付 雨森芳洲 — (2)

岩 崎 允 胤

目 次

I 白石の生涯

II 学問の特徴

III 海外への視野の拡大

——『西洋紀聞』『采覧異言』について(前号はここまで掲載)

IV 日本史への新たな展望(以下、本号)

1 日本史研究の方法論

——『古史通』『古史通或問』について

2 『読史余論』

——いわゆる九変五変説、その他について

付 雨森芳洲

IV 日本史への新たな視点

白石は、江戸期における数多くはない、しかもなかでもすぐれた歴史学者といえることができる。かれが晩年

に完成した大著『史疑』が今日に伝わっていないのは残念であるが、これを除いてもなお歴史学上多くの重要な業績があり、学問としての日本史学の形成と発展のうえに残したかれの足跡はじつに大きい。方法論上の貢献がとくに際立っているというだろうか。

主だった著作をあげれば、まず綱豊（のちの家宣）が甲府藩主であった頃その命を承けて編修した『藩翰譜』がある。慶長五年以降、封禄一万石以上の諸名家の始封・襲封・廩除（扶持米を除かれること）等の記録であり、史料的な価値がある。白石はその後この加筆修正につとめた（江戸を訪れた上方の公卿近衛基熙の補強もえている）。

また公武、治乱のさまを綴った『読史余論』は、将年家宣にたいする進講をもとにして成ったもので、古代（かれの用語では「上古」）は神武から書き起されるが、かれが主眼点をおいて敘述するのは、藤原氏の擅権による公家（朝廷）の衰微と、武家の興起と政権の掌握、そして応仁の乱から戦国時代を経て織豊政権によるその收拾まで、すなわち徳川幕府成立の直前までの過程であり、そこでの公武政権の相継ぐ変遷の経過を公家的および武家的の複合的視点によって捉えている。

ところで、『新井白石』における伊豆公夫の分類によれば、白石の時点からみて、その歴史体系のなかで『藩翰譜』が近世史にあたることすれば、『読史余論』は大づかみにいって中世史、（かれの用語では、一〇世紀の藤原純友と平将門による承平天慶の乱以降は「中世」と呼ばれるからである）さらに、かれの自叙伝ともいえる『折たく柴の記』は、そのなかに収められている同時代の政情等々にかかわる記述に注目すれば、これは、現代史にあたるといえるだろう。そして、古代史関係の著作としては、散佚している前記『史疑』は別としても、『古史通』、『古史通或問』、『白石先生遺文』がある。この最後のものは、水戸の立原翠軒の編纂に成るものであり、そのかなりの分量を占める「史論」は古代史にかかわるものである。これは『史疑』と同時代に書

かれ、その片鱗を伝えるところがあるといわれる。その他、水戸の安積澹泊、仙台の佐久間洞巖に宛てた書簡中に散見される古代史にかんする記述などがある。このように、かれの業績は、古代、中世、近世、現代（かれの同時代）にわたる浩瀚なものといえよう。

* いうまでもないが、古代、中世、近世、あるいは近代、現代というときのわれわれの今日の用語の含意を固定化して考えてはいけない。どの国でもこの民族でも、自分の立つ歴史的時点を起点として歴史を遡ってこれらの用語を時期区分のために使うからである。

伊豆公夫は同書で、『藩翰譜』や『読史余論』も、歴史著作として多くの傑れた点をもっているが、やはり彼の史学の白眉は、古代史研究にある³³⁾とみている。とくにその意義について羽仁五郎はつとに次のように簡潔に指摘している。「白石の時代意識の史学に於ける展開は『古史通』『古史通或問』を経て晩年彼がいわゆる上代史研究に没頭するに及んで漸く学問的性質を帯びて行った。当時いわゆる上代史の時代的考察は全く行われず、『本朝通鑑』や『大日本史』や『中朝事実』等もいわゆる上代史敘述に記紀等を無批判盲従的に抜抄して居り、朝廷公家の神道や幕府等に於いても『日本書紀』神代巻の辛うじての訓読を尊重して居り、『古事記』等は多く閑却されて居た時代に、そして文献学的研究としてもはじめて『万葉集』について契沖の『万葉代匠記』が完成したばかりで記紀については其等の多少とも学問的な研究も未だ容易に現れしめられなかった時代に、賀茂真淵、本居宣長等の『古事記』研究や谷川士清、河村秀根等の『日本書紀』研究等にも先立つこと約半世紀以前に、創見的にも白石は我が史学史上はじめて記紀の学問的研究に著手したのであった。³⁴⁾」

1 史学の方法論

——『古史通』『古史通或問』について

そこで以下、『古史通』、『古史通或問』によって白石史学の方法論的な特質をみよう。⁽⁴⁵⁾

(1) 実証的・合理的方法

二点について述べよう。

①まず、白石は『古史通』冒頭の「読法」の箇所で、「疑いを闕(欠)く」(『論語』「為政」篇中の句)⁽³⁶⁾ということ、すなわち、疑問のあるものは除けておく、つまり疑問のままにしておくことを、歴史研究の基本的な姿勢として力説している。かれの見解によれば、歴史書は事実にもとづいて事柄をしるして世上の人々に鑑戒を示すものと考えられるが、従来『日本書紀』について講義したり解釈したりする人々は、上古のことについて、詭弁を弄して異端の説を唱えており意味の分からない言葉にぶつかると、「神道不測以て論ずべからず」⁽³⁷⁾などといって、問題を神秘に委ねている。

白石によれば、どこの国でも太古の習俗は質朴で礼文に欠けていた。そうした昔のことについては、古来、「鴻荒(太古)の世、聖人取らず」といわれてきたが、それは、ただ大昔に説かれていたことが出鱈目であったためであるとは必ずしもいえず、伝わっているところに疑わしいことが多く、そうしたことは疑わしいままに残しておくのがよいとされたためである。『日本書紀』の記述は、ある一つの伝承だけを採用して他の伝承を切りすてるということをせず、伝承の異同をあるがままに書き残し、さまざまな判断は後世の読者に委ねており、これはよいことである。それなのに、後世の人々が説をたてるにあたって、眼前の事を論ずるように、すべて知らないところはないかのような態度をしばしばとっているのは、理解しがたいことである。白石はまた次のことも注意している。古代の伝えに出てくる奇異で荒怪な事柄については、それがはたして太古の質朴で礼文に欠けていた習俗を言いつぎ語りついできたものなのか、それとも太古の素朴さがだんだんと失われたのちになって、昔の事を神秘化するために、新たに言葉を造り出した粉飾にすぎないのかを、よく見きわめな

くてはならない、とする。

『古史通』の「凡例」でも、白石は、自分がこの著作のなかで引用した『旧事記』(今日は偽書とみられる)に出てくる神名や神号などで、古人の読みや意味が伝わっていないものについては、その読みを新たに付けることはしていない、これは「疑いを闕く」、つまり疑わしいものはしばらく措く、という立場を自分がとるからである。と書いている。

②「神は人なり」。このように簡明に断定的に白石は『古史通』(「巻の一」)の冒頭で書いている。そこは、この国が開けた最初に天地に生成した神として国常立尊からかれが説き起こしている箇所にはかならない。かれによれば、およそ尊ぶ人を「加美」と呼ぶのが、わが国の昔からの習俗であった。古今、その言葉は同じであり、尊尚という意味であろう。その後、漢字を仮りに用いるようになって、「神」とするしたり、あるいは「上」とするしたりするような、文字での表現上の相違が現れてきたとする。また、この連関で「尊」については、白石によれば、『日本書紀纂疏』(一条兼良作)に「わが国、その人を尊びては則ち御事というなり」とも説かれているように、上古の習わしでは、人を尊んでみなこれを「美許登」とたたえたのであり、そこには君と臣とのあいだに異なった呼び方があったわけでない。だから『古事記』には、君も臣もともに「命」の字を仮りに用いている。要するに、「神」とは人にたいする尊称であり、君臣の区別もなく、(したがってまた「尊」と「命」との文字の使いわけもなく)、ひとしく「美許登」という呼び名が使われたのであるとする。

* 天御中主尊、可美韋牙彦舅尊、高皇產靈尊などについても、これらの神聖は、東海の地で君となったので、その時代の人々は、「阿麻徒加美」(「阿麻」とはもと海の意)ともいい、またその至尊なことをとくに大いにたたえて「阿毎」(天の意)の加美とも申した。そこで、後世になって漢字を仮り用いるようになって、「天神」とするすようになった、と白石はいう。

このように白石は、古い伝承のいう「神代」の神々とは人間にほかならずとし、したがって、「神代」の記述を人間の歴史として解釈してゆこうとする。かれの解釈は、二〇世紀の前半においてさえも、皇統の神聖不可侵なこと（「大日本帝国憲法」第三条）を「記紀」神話によって基礎づける荒誕な神話が体制的にイデオロギッシュに作りだされ、帝国大学の憲法や国史学の講座から津々浦々の小学校の教室にいたるまで唱えられたことに徴すれば、じつに進歩的であった、ということができるだろう。もっとも、古代人における神話構成的思考の独自性を十分に考慮することなしに、神話のなかにストリートに人間の歴史をもちこむことは、「神話と史実とを混淆」することになるともいいうるであろう。しかし、「神代」の登場人物が摩訶不思議な神々であるなどということも白石は否定しているのであり、谷義彦のいうように、「古代日本の人間社会を政治史的に究明せんとした点に於いて、確かに白石は科学的であり、進歩的でありえた」といえるであろう。神々のごときものが存在するはずはなく、「記紀」神話のうちには、古代専制国家におけるイデオロギッシュな恣意的な虚構とともに、自然と社会の諸事象の空想的な反映（古代人の頭脳における）がみられるのである。わたくしもこのような観点に立つてかつて拙稿『「記紀」神話と古代人の思惟』（前掲『日本思想史序説』に収録）を書いたのである。

* 十五年侵略戦争の終了後に、現人神とされていた昭和がわざわざ「人間宣言」をしたことがある。二〇世紀の前半、日本には何とも話にならない「神話」が横行し猛威をふるっていたのであった。

(2) 古言古語研究の不可欠なこと

古^{いにしえ}に生起した出来事、その歴史（Geschehen→Geschichte）を理解するためには古言古語を理解することが不可欠な原点であると、白石は主張した。「よくよく古言をさとし得候へば、古事はそのまに見え候^①」とか

れはいう。当時すでに国学の領域にあって僧契沖は、古代の事実と精神を古言とその表現にそくして明らかにしようとする文献実証の方法^⑩によって『万葉代匠記』（精撰本、一六九〇年）を結実しつつあった。そして春満、真淵によってこの方法は受け継がれ、宣長において近世国学の大成をみるにいたるのであるが、契沖よりも二〇年近く歳若い白石は、儒学から出発しながら、同様に実証的・合理的な方法で日本古代の歴史に、言語の研究にたちかえってとりくむのである。

しかし、両者のあいだには注目すべき相異がある。契沖の場合、『万葉代匠記』のほかにもう一つ代表的な著作をあげるとすれば『和字正濫鈔』があるが、これら両著作は内容的にいつて全体的に相互にかなり緊密に結びついているといえよう。これにたいし、アンシクロペディスト白石の場合には、かれの歴史的関心は日本古代史の究明にのみ向かうのではなく、まず、公武の治乱を主題とした『読史余論』や幕藩制創成期以来の諸大名家の系譜を扱う『藩翰譜』、さらにかれ自身の同時代史にかかわる『折たく柴の記』があり、しかもそこから遙かに遠く、ヨーロッパ諸列強の世界進出、諸地域の「併取」「侵取」、それとともにギリシタンのアジアへの急速な伝播、新旧キリスト教のきびしい抗争、またとくに一八世紀始めのスペイン継承戦争などにまで関心は及ぶ。他方、言語研究においても、シドッチとの問対やオランダ人との会談によって、西欧諸語、中国語、朝鮮語、日本語の音韻や文字表現上の相異などを考察し、とくに日本語の音韻を研究したり（著作『東音譜』）、オランダ語固有名詞の発音をどのように日本語で表現するかについて検討したり、和・蘭両語の名詞についての相互の訳語（ときに、英語、フランス語、ポルトガル語、スペイン語、ラテン語なども出る）を大通事今村英生に学びながら二〇〇余りをメモしているなど、白石は西欧語にたいして積極的な関心を寄せている。かれの場合、このように、もし条件が許すならば、歴史の上でも言語の上でも、その研究はどこまでも外延的に拡がり、しかもつねに彼我相互を比較する視点を失わない。だが、そのようでありながら同時に、自国日本の研

究において、歴史と言語は不可分に結びつく。そして、古言の理解によって古事 of 理解への道が開けるとする。じっさい『古史通』がこのような道を通して結実しているのは明らかである。「巻の一」で「凡我國の古書を読には古語によりてその義を解くべし。今字〔いまの漢字〕によりて其義を釈くべからず」という。そしてまた同時に白石は、古代史学の研究とは相対的に独立な研究成果として語学書『東雅』『東音譜』を著わしている。前者は、中国古代の『爾雅』に倣い、しかも平安期の源順が著わしたわが国最初の分類体の漢和辞書『倭名類聚鈔』を拠りどころとして、天地より器物、草木、虫魚にいたる万物の名を、分類、解釈、考証したものである。しかも『東雅』は「総論」の冒頭で「天下之言には、古言あり、今言あり。其古今の間に於て、また其方言あり。方言の中に、亦をのをの雅言あり、俗言あり」(一〇九ページ)⁽⁴⁾と、きびきびとして明快な文体で書き起こしており、言語における時間(歴史)的、空間(地域)的、また階層(階級)的な岐がれが古今東西にわたって存することを述べ、さらに西方諸国の言語、中国語、朝鮮語、日本語の音韻、字母等々にかんする基本的な、相異点をも指摘している。ここでは白石は『古史通』すなわち日本古代史の研究からは独立に世界の言語現象にまで視野を拡げ、独自の言語観を展開しているのである。わたくしは白石の言論にはこれ以上上たらないが、このような広い比較言語学的視野を相対的に別個にいわば背後に独創的にきりひらきながら、かれは時を得ればまた『古史通』のための研究と執筆に専念し没頭するのである。古言古語を通じて古事を、というかれの方法は、このようにして日本史において前人がまだ踏みこまなかった領域に足をいれるのである。もしかれに十分に多くの時を仮し、しかもチャンスがあれば、もしかすると、かの青木昆陽(二六九八―一七六九年)に先立って、オランダ語の著作を自ら繙いて、『西洋紀聞』のさらに上を行く著作をも残すようになりえたかもしれない。白石は、ただしこしこと、『古史通』の領域、すなわち古代日本の「神々」の領域の研究にみずからを置いて済ましうるような学者ではなかったと思えるのである。

(3) 文献の考証について

『日本書紀』が元正の七二〇年(養老四年)に完成してから、その研究がやがて世の学者の専門の学とされてゆく一方で、『古事記』や『旧事紀』はしだいに顧みられなくなった。もっとも、『旧事紀』はのちに荷田春満によってはじめてその偽書であることが論証された。すなわち、この書物の「序」には蘇我馬子らが勅を奉じて撰したと書かれているが、平安初期の偽撰であることが明らかにした。しかし、白石はまだその偽書であることに気づいてはいない。そのうえでのことであるが、『古史通』の「読法」によれば、『旧事紀』、『古事記』、『日本書紀』のどれもみな、勅旨をうけてわが国の上古・「神代」以来の歴代君臣の事業を記載したものでありながら、記述内容には異同がある。それゆえ、もっぱら従来なされてきたように『日本書紀』の説くところだけに依拠して、『旧事紀』や『古事記』等の書を取りあげないのはよくないとする。「ただいづれの書に出し所なりとも、其事実に違ふ所なく其理義〔正しい道理〕において長ぜりと見ゆる説にしたがふを稽古〔古えを考える〕の学とはいふべきものなり」⁽⁴⁵⁾。そのほかにも種々の書物にさまざまな説が出ているけれども、恣意的なものが多く、朝廷の正史や実録などに出ていないことは、証拠として用いるわけにはいかない、としている。

このように、古代の多くの伝承のなかから事実を伝え理義においてすぐれたものを採用すべきことをかれは説いているが、前述した『旧事紀』についてはまだ偽書であるとするにはいたっていないものの、内容的に疑義が少くないことには気付き、とくに次のようなことを指摘している。この書物には重複や錯綜があり、全体として未完成であるといえる。とくにそのなかに書かれている神奇鬼怪なことについては、好みに溺れて、老子の説によらなければ仏説にもとづくなどといった仕末であり、後世の異端を唱える徒がこの書によってあれこれと勝手なこじつけをおこなうのも、このことに、起因していないとはいえない。まして、この書は、書き

始めのところで、伊弉諾いざなと伊弉冉いざなは兄妹であって夫婦になるといったり、書き納めおさめのところには婚姻に秩序のないありさまを述べている。こんなことでは、この書をもって、名教のうえで何の教えとし、鑑戒かんけいのうえで何の戒めとすることができらうか。しかるに、後世この書について述べる者は、その謬りをいたずらに踏襲するばかりで記述の非であることに気付かない。また、後世この書について説く者は、記述の非であることを知りながらもその謬りであることを正さない、ただひたすらに、神道は測られない、と神秘化するだけである。こんなひどいありさまなので、一言弁じておかざるをえない。このように、白石は『旧事紀』偽撰説にはまだ及んでいないが、その記述内容に多大の疑義を挟んでいるのである。

(4) 比較史学的・世界史的方法について

『古史通』、『古史通或問』には、『古事記』『日本書紀』などのわが国の歴史書の記述を、白石がたえず『魏志』、『宋書』、『後漢書』、『晋書』、『隋書』、『唐書』や『三國史記』などの、中国や朝鮮の歴史書の記述と、比較照合して検討しながら、学問的に確かな歴史把握を仕上げようと努力していたことが随所にみうけられる。この比較史学的・世界史的方法はかれにおいてとくに際立つものであって、これは日本史学が東アジアの歴史叙述のなかで独善的・孤立的なものであってはならず、国際的な視野をもって比較的・総合的に研究をすすめてこそ、はじめて学問的なものとして成立しうるという自覚に立ったものである、といえる。——われわれはここで、二〇世紀にもなって皇国史観にもとづく日本史学が、『日本書紀』による荒唐無稽な紀年を抛りどこのとして、一九四〇年（昭和十五年）を「皇紀二千六百年」と銘打ち、侵略戦争遂行のイデオロギー的基礎としていたことを想起しないわけにはいかない。^{*}^{*}^{*}

* わたくしが比較史学的方法に明確に接することができたのは、戦時中第一高等学校における『東洋史』の講義で、若き榎一雄教授から『魏志倭人伝』なる著作の存在について聴いたのが最初である。古代中国における卑弥呼の記述が

皇国史観の非科学性をまづもって照らし出していることは明らかである。

*** この世界的な国際的視点は、かれが他方で『西洋紀聞』『采覧異言』等々、世界各地の地理・習俗・政治・経済などについての著作を仕上げたことと深いところで不可分に結びついていることに留意したい。

折りしも水戸藩では、三宅観瀾、栗山潜鋒、安積澹泊らを擁して『大日本史』編修の事業を推進していた。白石はかれらと学問的に交流し、相互裨益するところがあったようである。とくに澹泊とは、前述したように、晩年、心のこもる書簡を交わしていた。白石は、その言語学的著作『東雅』を書写するため借用したいとの澹泊の申し出でを快諾し、澹泊はまた、白石の乞いを承けて『東雅』の「序」として、かれならではのみごとな美文を書き送っている（なお、前述したように、『白石先生遺文』は、後年、水戸派の立原翠軒の編に成るものである）。白石と水戸派とのあいだにはこのようなさまざまな学問的な交流があったのであるが、しかし、水戸派は中国や朝鮮の歴史的著作との比較考証の視点に欠けるところがあり、この点で白石は批判的であった。このことは、白石の佐久間洞巖宛ての書簡でもうかがうことができる。すなわち、一七二四年正月の書簡では、水戸派では本朝（わが国）の文献しか扱わず異朝（外国）の著作を参考にしないことを、次のように難じている。「水戸にて出来候本朝史などは、定て国史の訛あたまりを御正し候事とこそ頼もしく存候に、水戸史館衆と往来し候て見候へば、むかしの事は日本紀統日本紀等に担任せられ候体ていに候。それにては中々本朝の実事はふつと「まったく」すまぬ「片が付かない」事と、僻見にや候やらむ、老朽（老生）などは存じ候。本朝にこそ書もすくなく候へども、後漢書以来異朝の書に本朝の事しるし候事共、いかにもく実事多く候。それをばこなたに「こちらでは」不吟味にて、とかく異朝の書の懸開之訛と申しやぶり、又は、三韓は四百余年本朝の外藩にて「これは当時における認識の誤りであろう」、それに見へ候事にも、よき見合せ候をも「比較して見るべきものがあったも」右の如くにやぶりすて候。本朝国史々々とのみ申す事に候、まずは本朝の始末、大かた夢中

に夢を説き候やうの事に候。」⁽⁴⁶⁾

同年また白石は次のように書いている。「古を論じ候には、我身を古に置き候て古の時を以て古の事を論じ候はでは参らぬ事に候。去年やらむも、水戸の衆へ、魏志に候倭国の国名はいかにとたづね候へば、伝聞の訛と見へ候て、一所も存寄無_レ之由に候き。老拙見候ては、しれ候はぬ〔知られていない〕は五六ヶ国も候か、不_レ残たしかに當時も候所々に候。此魏志は其時に彼国の使往来候て見聞の及び候所をしるし候故に、里数、戸数までもたしかにて、けく〔むしろ〕こなたの今日が伝聞の訛にて、魏志は実録に候。如_レ此の所〔今に拠つて古を驗すのではなく、古への事を古への文献によつて確かめること〕が古学の益ある事にて、第一の要に候。日本紀などははるかに後にこしらへたて候事故に、大かた一事も尤らしき事はなき事に候。」⁽⁴⁷⁾

白石はまた『旧事紀』よりも『古事記』の方が実録とみなしうる所が多いことを、三韓の歴史書との照合によつてたしかめ、こういう海外の歴史書を顧みないのは不学のことである、と難じている。いわく、「すでに天武天皇の旧事紀はいつはり多く候とて御改候はんとの 詔_{みことり} 候処に、崩御にて、其事功成り候はぬ〔実現しなかったこと〕に付て、古事記は勅撰にて旧事〔紀〕とはよほどゆきちがひゆきちがひくし候て、いかにも実録と見へ候事共、多々有_レ之候。殊に異国の史、三韓の国史に引合せ候に、ひたと合候ものに候。此書〔三韓の国史〕などを世にはなにもなきやうに心得候事、よくよく不学の事やと被_レ存候事に候。」⁽⁴⁸⁾このようにして白石は結局、ここでも『旧事紀』については大分信用できないものとみなし、その記述に疑義を挟み、しかも『日本書紀』よりも『古事記』がよく実録を載せていると思えるとし、ともあれ、外国の歴史書と照らし合せて検討することが不可欠な研究の手續きであることを主張しているのである。

V 『読史余論』——いわゆる九変五変説、その他について

『読史余論』は一七二二年（正徳二年）春から秋にかけて、家宜にたいする侍講のつどその終了後、別に座をもうけて本朝代々の沿革、とくに公武の治乱について白石がおこなった講述の草案をもととして成りたったものである。この進講のさい、白石は紙面に細字で書き詰めたメモ風の草稿をいつも懷中に用意していた。白石はその頃家宜の命をうけてこの進講のごく大略をしるした小冊子（『本朝古今沿革余論』などとよばれる）を作っている。しかし、進講が完了してまもなく、家宜は病み、同年十月に没したこともあって、おそらくその後長らく筐底に埋もれていたが、白石は晩年内藤宿でその定稿化を志し、一七二四年（享保九年）にこれを完成した。

この経過からわかるように、『読史余論』は、將軍家宜唯一人にたいし、直参じさんの儒者、しかもその信頼を得て政務にも参与する白石がおこなった講義を内容としており、かれが古今の儒学に通じた儒者として、もっぱら將軍のために、自国の歴史のなかから鑑戒をもひきだしながら、講じたという条件によって、その基本的な性格は規定されている。すなわち、かれはそのなかで、家康の創業を讃え幕府政治を肯定し、——しかも当時公武（朝幕）間が融和の關係にあったことを反映して——朝廷尊崇の名分をうたい、現状維持の封建的なイデオロギーを随所に示しているのである。もっともかれは家宜の直々の側近にあり、かれ自身が公武連係の政策をもうちだして幕閣に参じていたのであるから、これが白石のそもその立場であった、というべきであろう。ただ前述の条件のためにこのことが公武の治乱のさまを綴ったこの著作にはとくに顕著に現れているということができよう。伊豆公武が『新版日本史学史』（一九七二年）で、「当代における支配階級の代表的な『歴史』として、そうした階級的地盤にもとづくイデオロギーの、きわめて明瞭に——いわば彫塑的な表出が試みられ、

客観的には当該社会の『古典的』円熟と同時に、その露骨な現状維持的保守精神を一貫せしめたという点に、意義と価値がある」と指摘しているところである。⁴⁹⁾

『読史余論』に日本の歴史にかんする古来から同時代までのじつに多くの書物から引用がある。なかでも『神皇正統記』からの引用がとくに目に付き、実際かれは尊皇思想をはじめ多くを親房から学んでいる。その他『古事記』、『日本書記』、『旧事紀』、『太平記』などはいわずもがな、進講にあたっては紅葉山文庫⁵⁰⁾などを大いに活用したであろうことは、当然推察される。引用のさい林鷺峰の『日本王代一覽』から借用したところが少なくないともいわれる。昔はこういうことはつねにあった（というのは、今とはちがって多くの文献を手許に置きたい、以前に読んだことがあり記憶していても、読んだときに書きとめておかないと、執筆のとき引用もできないからである）。つまり、今日の言葉でいえば、白石には孫引きもあるという指摘である。しかし、これは何も白石に限ったことではないであろう。ともあれ、白石は、内藤宿に隠居した時期には不可能であるとしても、進講のさいには可能なかぎり幕府の書庫を利用し抜き書きのメモも怠らなかったのではないか。古今の名立たるテキスト（当時でいえば写本などとしての）があれば一度はそれにじかに触れ、丁をめぐりたいというのが、今も昔も古典にかかわる真正の学者の「魂」であろう。

* 上記したもののほか、『朝倉始末記』、『東鑑』、『大内義隆記』、『桜雲記』、『応仁別記』、『花宮三代記』、『玉海（玉葉）』、『愚管抄』、『公卿補任』、『江談』、『後三年の記』、『古事談』、『承久記』、『湘山星移録』、『新撰姓氏録』、『樵談治要』、『職原抄』、『純友追討記』、『親元日記』、『尊卑分脈』、『難太平記』、『南朝紀』、『南朝紀伝』、『信長公記』、『梅松論』、『扶桑略記』、『保暦間記』、『将門誅害日記』、『三好家譜』、『康富記』などである（以上、アイウエオ順）。

『読史余論』は三巻から成り、第一巻では、その最初の節で、本朝天下の大勢が、九変して武家の代となり、武家がまた五変して当代におよぶ、とみる、かれ独自の九変・五変の時代区分説を総論的に述べている。ここで

は公家的視点と武家的視点とが複合的にとられており、両者が交錯して二つの変の連関・移行が説明されている。まず、九変についてであるが、冒頭の数行をみよう。「神皇正統記に、光孝より上つたかたは一向(まいった)の」上古也、万の例を勘ふるも、仁和より下つたかたをぞ申める」としたうえで、「五十六代清和、幼主にて、外祖〔母方の祖父〕良房、摂政す。是、外威専権の始。一変、基経、外舅〔妻の父〕の親によりて陽成を廃し光孝を建しかば、天下の権、帰於藤〔藤原〕氏。そののち関白を置き或は置ざる代ありしかど、藤氏の権、おのづから日々盛也。二変、六十三代冷泉より、円融・花山・一条・後一条・後朱雀・後冷泉、凡八代百三年の間は、外威、権を専にす。三変、(二八四ページ)とある。

このように白石は朝威の衰微の因を外威藤原氏の擅権にみており、そのそもその端緒は、藤原良房が幼帝をおしたてたところにある、すなわち、文徳のあと、生まれてわずかに九ヶ月の清和が擁立され、外祖父藤原良房が摂政となったところにあるとする。つぎに二変は、基経が陽成を廃し光孝を建て、みづから関白となつたところに求められる。以下、冷泉以後八代のあいだ、摂関家が権勢をふるい(三変、その後、一時、天皇の親政に戻つた(四変)が、上皇の政治、すなわち院政となり(五変、ついに源氏が天下兵馬の権を分掌する(六変)。ついで北条氏が陪臣の身で国政を執り(七変、後醍醐の復位(八変)を経て、南北朝が分立し、室町幕府が成立することとなる(九変)。他方五変についていえば、源氏に始まり、北条、足利、織豊を経て、徳川に至る武家のあいだでの権力の推移がある。

それゆえ、九変五変説は、およそ八百年の年月の間における権力の質的な転換を、大きくはまず公家(朝廷)から武家へのその移行としてつかんだうえで、より詳しく公家と武家とのそれぞれにおけるその転換を段階的にたどり、しかも両者には相立に重なりあう時期であったとして、全体としての公家から武家への権力の質的な転換を捉えかえすものである。すなわちここでは、ただ一連なりの継起的な推移関係としてこの歴史をみる

のではなく、二元的・複合的な視点を通してかれは全過程を統一的に把握しようとしている。これは、ユニークな歴史把握なのであって、徳川武家政治の時代にたてられた構想として大局的に首肯することができらう。

さて、第一巻では、九変の経過について詳述し、次のように結語している、「かく王家のおとろへ給ひし事のよしを按ずるに、はじめ文徳の幼子をもて儲位〔皇太子の身分〕にたて給ひしより起りて、終には院中の御政務におよびて、其威權〔威勢と権力〕をあはせて武家に仮〔借〕貸しあたへさせ給ひしに、事なりぬ。さらに一日二日に万機あり〔たとえ一日たりともおろそかにしてはならない〕といふ事、もっともよく心得らるべき事にや」(二七七ページ)。次いで、第二巻では、古代には地方征我は天皇よりおこなわれたこと、中世(かれの時代区分で)以来、將軍の職が世襲となったこと、源頼朝父子三代のこと、北条が代々天下の權をつかさどったこと、後醍醐の中興政治のこと、また第三巻では、足利が北朝の天皇をたてたこと、足利代々の將軍のこと、信長治政のこと、秀吉天下のことを、逐次詳述している。

* ここで注目しておきたいのが、この著作のなかでの天皇についての白石の呼び方である。さきの引用文からもただちに分かるように、かれは、尊王思想をもちながらも、呼び捨てで天皇の名をあげてある。この著作中で「天皇」「帝」と呼ぶこともごくたまにはみかけるが、基本的には呼び捨てで一貫している。わたくしは論文中で以前から天皇であろうとなかろうとすべての人間の呼称に何の例外をももうけなかった(たとえば『日本思想史序説』新日本出版社では、たんに天武、持統等々ですましている)が、白石の記述に接して、まさに同感である。しかし『日本の名著』15における桑原武夫による『読史余論』の訳文では、前記引用文の箇所では天皇の名が列挙されているためにすべてについて一々「天皇」を付してもいられないためであろうか、所々でその語を除いてもいるが、訳書全体では、一々「天皇」の呼称がわざわざ付加されている。これは桑原武夫の姿勢であり、今日なお多くの筆者にみられるが、他のすべてが敬称略である論文ではとくに白石の例に倣うことを期待したい。

『読史余論』における叙述は、数多くの史的諸著作からの、もとより当時の諸条件の許す範囲内での博引旁証のもとに、硬質な文章力をもってすすめられている。登場人物の動静をも交えて描くそこでの歴史の展開は、折々「接するに」に始まる白石自身の識見に富む評言をも織り込んでいく。総じて、われわれ、この国の往古の治乱興亡の歴史をかれがどう捉えていたかという関心をもって繙くものにとって、今日なおなかなか読みごたえのある力作ということが出来る。江戸期の代表的な歴史書ということが出来るだろう(頼山陽の『日本外史』『日本政記』への影響も小さくないといわれる)。

さきに指摘したように、かれはその置かれた武士政権の立場から当然予想されるように、おおむね現状肯定的、そして保守的であり、著作のなかからその面だけをとりだして幕府イデオログとしてかれの限界を示すことができる。だが、このような面が多々あることを認めたくて、以下、別の問題からみてゆくことにしよう。

いくたの歴史的激動を経た、慈円(一二世紀後半から一三世紀)・親房(一四世紀)および白石の、三者それぞれの歴史的著作を単純に並べて同日に論ずることはもとよりできないが、白石は、神代などは構うことなしに、ほかでもないこの日本の人間の歴史をとりあげている。この点、慈円や親房はどうであったか。わたくしは『日本思想史序説』で次のように書いた。「慈円の場合」最初の簡略な中国の年代記には、頭から、……天地開闢の初めに世に出たとされる天子、古代の伝説的な三人の天子が逐次あげられる。以下、降って、隋、唐、五代、大宋にいたる。はなはだ簡略なものとはいえ、異国のこの年代記は、『愚管抄』の初めにまるでとってつけたようである。大隅和雄のいうように、これは「慈円が中国を世界の中心と考えていたことのあらわれであろうか。……〔これにたいして〕親房の『神皇正統記』にはこのような中国の年代記などは書かれていない。天皇のもとでの歴史(つまり人代)の前に置かれているのは、いわゆる神代である。ところで、〔天台

僧」慈円にはかえてこの神代がない。あるいはかれは、神代と人代とがどれほど質的に異なるとみるにせよ、結局、あたかも神代から人代へと接続するかのようによくことに躊躇^{ためらい}があったのかもしれない（しかし、かれは「本文のなかで」頭の世界と冥^{みよう}の世界とを、すなわち目に見えるリアルな世界と、目に見えない隠^{おカルト}れた世界とを分け、冥の世界での天照大神と藤原氏の祖先神、天兒屋根命^{あまのこやねのみこと}との議定など、皇室と藤原氏との合体についての神のはからいをまじめに考えているのである。）しかし、親房の場合には、いま述べたように、人代の前に神代が置かれている。そしてそもその開巻冒頭に有名な文章『大日本者神国也^{おほやまとはかみのくに}。天祖^{あまつおや}ハジメテ基ヲヒラキ、日神^{ひのかみ}ナガク統ヲ伝給フ^{つた}。我國^{わが}ノミ此事アリ。異朝^{いいてつ}ニハ其タグヒナシ。此故ニ神国ト云也^{かみくに いふ}』がある。⁽⁵¹⁾ 白石がこの点にかんし実証的・合理的な立場をとっていたことは、かれの古代史研究や鬼神論に徴しても明らかである。儒学のもつ一定の実証性・合理性をわれわれはここにみてとることができる。

『日本思想史序説』でわたくしはつづけて次のように書いた。「親房も、少しあとの箇所では、世界の構成のなかで日本を位置づけ、須弥山^{しゆみせん}を中心とし、日本は天竺^{てんしゆく}（印度）からも震旦^{しんたん}（中国）からも東北のかなたの海中にある別の州^{しゅう}であって、神明が皇統を伝え給う国である、と述べている。この点で、親房は、当時の一般的な知識レベルながら、かれなりに日本を世界のなかで地理的に客観的に描いたうえで、歴史の筆をすすめている。これと比べると、慈円の方は、あまり巧みとはいえない仕方では、とてつけたように「わざわざ」中国の年代記を著作の冒頭で示し、天皇の年代記に先行させているのである。」⁽⁵²⁾ 須弥山＝世界中心説および天竺・震旦・本朝の三世界説が、やがてポルトガル人の来日、キリシタンの伝来などを経て、客観的には一挙に崩れ去ったのは、いうまでもない（親房はまだこの世界のことを知っていなかったのである）。そして世界図、地球儀の伝来がある。白石はいまや、シドッチとの問対などを通して、全世界に向かって当代技群の広い視野を想像力豊かに、そしてリアルにくりひろげていたのであった。『読史余論』は、この広大な視野を背後において書

かれています。

そこで、いまかりに社会構成的特性をひとまず置いて単純に年代的に、白石の生涯を、西欧フランスの思想家の生涯と並べてみると、誕生したのは、白石は、デカルトに遅れること六一年、また、ラメトリに先立つこと五二年、ディドロには五六年、ルソーには五五年、先立っている。しかも白石は、武家封建社会のまったく幕閣に手をおいた儒者によった。かれが、西洋の資本の秘める強大な力と新しい政治の動向とをある程度感得しておりながら、ついに封建制イデオログであるにとどまり、徳川幕藩体制の永続的なものではありえないことを少しも洞察しないとしても、無理からぬことであつたらう。

以下、『読史余論』のなかからごく若干の注目すべき論点を断片的にとりあげることとしよう。

①まず、たしかに、伊豆公夫の指摘するように、白石にも現象追隨的、現状維持的な姿勢がしばしば現れる。たとえば、「按ずるに、清和の皇統、陽成にて絶^{たえ}たり。しかるに頼朝より此かた、武家世をしろしめされ人々〔頼朝以下徳川に至るまで〕、皆これ、その皇胤なり。天意のほど、はかりがたき事とぞ覚ゆる」(二八八ページ)というごときである。この点については、「將軍は皇胤であるとのことを以て、何らか幕府政治を合理化しようとするに至ってはナンセンスである。発展の動力を『天意』に求めるのは、大歴史家としての白石の理論的自殺である」⁵³⁾との伊豆の評言には、まったく同感である。

②また頼朝にたいしては、当時の社会的混乱を收拾するのに功があつたものとしてはその力量を買っているが、批判は手きびしい。「頼朝のはじめ軍起^{いくさ}せし事、王を勤め〔天与のために力を尽し〕民を救はむとの心にはあらず」と断ずる。すなわち、「平家の罪惡貫^{くわんいんし}盈〔全国にひろがり〕、天下の豪傑あらそひ起りしにあたりて、高才逸足〔頼朝〕ついに其鹿を得たりし也〔めざす大利を収めた〕」と。頼朝の軍勢はあれほど速かに功

を収めたにしても、それはたんに表面的に大義名分があったようにみえるだけのことにすぎない。頼朝はいつも自分の「勲勞」に思いあがっていた。「朝家〔皇室〕をおびやかし制しまいらす。まことに天の功をぬすめりとやいふべき」と酷評している。だが、時代の趨勢として公家から武家に権力が移らざるをえなかったことは、白石も肯定している。すなわち、名分においては尊皇論を、実質においては武家政治肯定論をとっているのがかれの立場である、と伊豆はいう。⁶⁴幕藩体制中期のイデオログである白石が幕末にみられるような斥覇論者でないのは当然である。

③建武の中興、後醍醐の治政についても批判はきびしい。「又按ずるに、中興の初政、ことごとく議するにたらず。」「いにしへ朝家のいまだおとろへざりし代のごとくになしかへされんとし給む事は、其かたぶきやぶれしを、やがてをしなをして紛飾を加ふるにことならず。そのくつがへらむ事、日をさして待つべし〔日限をきめて待てるくらいである〕」。だが、治政の誤謬はそれどころではない。「しかるに民の肩いまだやすからざるに〔民が生活の重荷にまだ苦しんでいるのに〕、大内〔内裏〕を建へられんとし、まづ宦官〔権力者におもねる近臣〕・媵妾〔そばめ〕・伎能〔芸人〕・僧法師の類に所領賜りて、軍功ありしものにわかち給ふという事もなく、たまたまたびぬる〔賜わったもの〕をやがて〔そばから、すぐに〕召返〔とりかえ〕さるゝの類、ただこれその乱をまねき給ふ所也」(三三七―八ページ)と白石はいう。南朝が義満・義持・義教らに欺かれて「南帝の統」が断絶したのも、「後醍醐の院の御積悪の余殃」(三三五ページ)であるから、事煩わしくかれらを恨むべきではなからう、と御醍醐を名指して批判している。

④中興の治政が民の費えをいささかも顧みるものではなかったことを批判した白石は、足利義政の治政についても、「按ずるに、天下やゝ定りぬるに及ては、驕侈必らず生ずる事にや」(三九六ページ)と、天下が安穩になると、きまって奢りとぜいたくが始まるのではないかとし、『応仁記』の記すところによれば、室町家

(足利將軍家)の政治の乱は、すでに義満の代に萌し、義教の代にひろがり、義政の時にいたって極まったという。「国用〔国費〕の不足するといふ事は、皆これ、上一人の驕奢〔驕慢と奢侈〕によれり。この流弊、下民〔しもじもの民〕に属して、愁苦せしところの禍、終に又上一人に属するもの也。」つまるところ、「天下の乱といふものは、そのよる所、端〔端緒〕多しといへども、その根本は、天下の財つきて民窮りて、大名貧しくなれるより、事起る事也」(三九六ページ)。この最後で一般化して述べた文章は、「大名」の語が出てくるのももちろん封建制を前提とするかぎりでのものであるが、白石がまさに政治の要諦として重視して警戒していたところを述べたのである。民を窮乏させてはならないということは、かれの志す仁政の根幹にかかわる事柄だからである。この問題についてのかれの指摘は、「民力を殫〔尽〕し国財を費す」(四〇三ページ)、「民力日々につかれ、国財日々にまづし」(四二六ページ)等々、著作中あちこちに散見する。時代を遡るが、あるとき北条泰時にある僧侶が伽藍の建立を頼んだところ、執権は、そのようなことをすれば莫大な費用がかかり、民を安穩にする方策でないどころか、かえって民を苦しめることになる、といってこれを拒否したことを白石は述べ、「寺作る志ありなば、まづ四海にみてる流芳〔流浪〕の民をすくふ謀こそ、あらまほしけれ」(三三二ページ)と書いている。民の困窮にたいしてはかれは寝食を忘れて尽力する志をもっていた。もちろん白石は幕藩体制のもとでの政治を志していたけれども、だからといって、治者の利のみを願い、民の利をただそのための手段としてのみみなしていたとはいえないであろう。儒教には儒教なりの理想があったといわなければならない。

⑤名教〔人倫の名分をあきらかにする教え、つまり儒教〕の乱れていた応仁の世の浅ましさを次のように白石は描いている。「かく名教のみだれし事、まことに乱世にてはありけり。かかる世のならはしなりしかば、君を弑し父を弑しても、戦にのぞみて勇あるをのみたつとぶ事にてありしほどに、信長もやがて光秀に弑せら

れ、子息信孝も秀吉にころされ、信雄も秀吉にかたづけられ給ひき。あさましかりし事なりき」(四二三ページ)。また、秀吉の天下を掌にした因を論じて、「此時、乱臣、賊子、天下に首をならべて、ただ勇材詐謀ある人をのみ尚む事をしりて、仁義忠孝などいふ事をしらざる時にあひ給ひき。これ時運に乗ぜられしいはれ也」(四二九ページ)。秀吉の成功もただそういう時の運に乗ったにすぎない。何ら人徳のいたすところではないとする。

白石は儒学の立場から戦国時代における倫理道德の崩壊した状況を批判しているが、われわれも、たしかに、この時期、人倫が墮ちるところまで墮ちてしまっていたことを痛感する。ひろがえて今日では、儒学の教える名分、仁義忠孝を倫理規範として掲げることが、過去のこととなっている。とはいえ、いまここには諸例を列挙しないが、まさに今日もまた、世上における倫理・習俗の頹廢のさまは、大事から瑣事にいたるまで目を蔽いたくなるほどになっているようにわたくしには思われる。

⑥白石は秀吉の実施した重刑を批判し、その検討を提言している。すなわち、秀吉は軍法で一戔切りを始め、たとえ一戔盗人だけでも死刑に処したといわれる。そのような乱脈の時代だったのである。その後、「刑罰すでにおもくなりしほどに、〔徳川の時代になって〕重罪の輩をば或は切腹・斬罪・獄門に懸く・はりつけ・火あぶりなどという刑出来れり。死は共に一つ也。凶悪をなさむもの、いかでか死するさまの異同をとふべき。かゝりしかば、国に大辟〔大罪〕のものつねに絶ず、〔徳川の平和な治世になって〕百年の今、残にたえ殺をすつ〔残忍を庄さえ殺伐を棄てる〕べき時におよびても、猶、其刑重し。議せらるべき事にや」(四三〇ページ)。きわめて重要な提言である。

⑦さいごに『読史余論』の末尾で、白石はキリシタン禁制について「当代〔当の時代〕にて出来し法の、末代にて議すべき事は、耶蘇の事に起りて、宗門〔とくに宗門改めをいうか〕といふ事を以て政事の要とせられ

し事、その時にあたりては、夷狄を以て夷狄を治むるともいふべし。今におるては、いかゞあるべき」(四三一ページ)と書いている。「夷狄を以て夷狄を治む」とは、キリスト教を抑えるためにかつて別の宗門である仏教を大いに利用したことを具体的には指している。クリシタン禁圧政策にたいする白石の疑問である。これは「鎖国」という幕府の根本的政策のやり方にかんするものであり、伊豆公夫のいうように、相当大胆で進歩的な態度である、ということができるだろう。⁶⁵⁾『西洋紀聞』でも書いているように、すでに支那(清)やシャムがかつての禁圧政策を解いていることを白石は念頭にいれているのである。いまここで述べているのは直接的には宗門改めにかんしてであろうけれども、その背後の思いとしては、おそらくかれは、世界の歴史の趨勢のなかで、幕府のクリシタン禁圧と「鎖国」の政策がいままでも保持しうるものではないこと、すなわちその暫時的なものであることを察知していたのであろう。クリシタンの教えは、シドッチのような真摯な人物を生みだしているかぎり、そして自国の治政が乱れていないかぎり、政治的・軍事的「併取」「侵取」とは将来的に必らずしも結びつかないであろうことを、なにほどか洞察していたのかもしれない。

付 雨森芳洲

^{あめのもり}雨森芳洲(一六六八—一七五五年)は近江の伊香郡に生まれ、京都に育ち、医学、ついで儒学を学び、一七、八才の頃に江戸に下り木門に入った。白石は三、四年遅れて入門、ときに三〇才であった。芳洲は白石、鳩巢らとともに「木門五先生の一人」に数えられる。二二才のとき師に推挙されて対馬藩に出仕することとなったが、なお四年ほど江戸での研究が認められ、その間、師の勧めで唐話^{からな}を学びはじめ、長崎に赴いて唐音を学び任地に赴いたのは、二六才になってであった(白石が甲府藩主綱豊に出仕したのもその頃である)。かれはまた、二九才のときから足掛け三年、長崎でさらに唐話・唐音を学ぶ機会を与えられた(後述するが、かれは

その後、朝鮮語の修得に努め、かれ自身は謙虚に語るが、中年になって新たに異国の言語を学んだものとしてよくこの言語にも熟達するのである。三一才で帰任して、朝鮮方佐役（対鮮外交の補佐役）に就いた。

* 江戸時代、中国語は唐話といわれた。また、宋・元・明・清の中国音は、総称して唐音といわれた（なお隋唐時代（ちやうど）の中原（げん）の音は漢音という）。宇治の黄檗宗万福寺（開山したのは、中国僧隠元である）では中国語が日常語られており、朱塗りで彩色豊かなこの寺に京都に住む芳洲も少年期には訪れたことであろう。当時儒学者として唐話・唐音の重要性にいち早く気付いたのは順庵といわれる。そして対馬藩に赴く芳洲にとくにその修得を勧めたのである。芳洲より二年ほど年長の徂徠も数年遅れてこれを学びはじめた。綱吉、柳沢吉保が大いに関心をもつようになったこともあり、元禄から正徳にかけて、範囲は限られていたとはいえ、唐話は儒学者のあいだでかなり流行したようである。芳洲は当時日本人の儒学者としてこの面でも傑出し、唐話はもちろん、中国の文献も、いわゆる訓読によらず、唐音によって直読することを旨とし、周囲の者にもそれを勧めた。

芳洲を理解するためには、簡単にでも、当時日本の政治・経済のなかで対馬藩の占めていた位置を一瞥しておく必要がある。対馬藩の宗家は日朝双方に服属する形をとっており、藩は両国の経済・外交上の重要な接点をなし、仲介者の役割を担っていた。延宝から元禄にかけて絢爛奢侈の風潮のいやまず日本では、華麗な絹織物生産のための中国産生糸の需要が急速に増大し、そのかなりの量が朝鮮・対馬經由で、銀との交換で輸入された。しかも対馬の銀山は多くの銀を産出していた。そのため当時対馬藩は経済的に豊かで最盛の時期であったといわれる。外交上では、両国間の諸般の公的な折衝はもとよりのこと、とくに將軍の代替わりに慶賀のために訪れる総勢数百名から成る来聘使節団の江戸までの往復の大がかりな接待と、朝鮮王の代替わりごとの幕府使節の釜山往還の世話とを受けもっていた。朝鮮では朱子学が国教の位置を占めており、儒学・詩文にすぐれた学者・文人が多く、かれらは使節団に加わっていた。それゆえ、藩としても、有能な儒学者を藩臣としておく必要が生じていた。

対馬藩士で先輩の陶山訥庵、ほぼ同年の西山健甫（阿比留ともいう）も、順庵の弟子であった。健甫が二九才で夭折したあと、芳洲が師の推挙で遠い両国海峡に浮ぶ対馬藩に赴いたのは、生活の安定と読書の余裕が得られるからであつたらう（ついで順庵門の松浦霞沼——『朝鮮通信大紀』の著者——も対馬藩に迎えられた*）。中年になった頃、芳洲は、おそらく、江戸における白石の幕閣内での活躍を遠くからみるにつけても、孤島での必ずしも常時多忙とはいえぬ生活になにほどか苦悩と焦慮を覚える日々もままあつたようである。対馬での活動はたしかにかれに他の儒学者には得ることのできない貴重な経験を与えはした。しかし、若きころ青雲の志を抱いていたであろう一廉ひとかどのこの俊秀の身、その活動がおおむね狭隘な辺土に跼蹐し、大きく雄飛する機をついに失ったのは、人間万事偶運の織りなすところが小さくないとはいえ、惜しむべきことであつたのかもしれない。

* 申維翰の『海游録——朝鮮通信使の日本記行——』（姜在彦訳注、平凡社、東洋文庫、一九七四年）は、著者が一七一九年（享保四年）の朝鮮使節に製述官として随行したさいの記録であり、ここには、朝鮮の側からみた当時の日本についての万端のことが綴られていて、興味ぶかく、また重要である。雨森芳洲や松浦霞沼も当然登場してくる。姜在彦は、注のなかで雨森、松浦兩人について次のように書いている、「製述官申維翰にとつて、雨森と松浦の二人の記室とは、他の人との儀礼的な接触とちがって、対馬から江戸にいたるまでの往来をつうじて、もっとも深く接触している。そりわけ雨森東（芳洲のこと）とは、それぞれ自国の威信をかけてよく喧嘩もしたし、ときには儒学者ならではの機智に富んだ応酬もしている。いわば人間臭い駆け引きがあり、お互に気を許せない好敵手であつたようだ。対馬には、朝鮮との外交および貿易を管掌するために朝鮮方たてがあり、雨森と松浦は、儒者として真文役（真文とは漢文のこと）として招聘されている。記室とは、いうまでもなく、真文役にたいする朝鮮的表現である。」姜在彦はつづけて、一七一一年（正徳元年）朝鮮信使来日のさいの、白石の建議による待遇方法の改革および当時の江戸幕府による対朝鮮外交の重視について次のように書いている。「一七一一年に朝鮮信使を迎えたとき、新井白石は、ときの將軍徳川家宣の信任によって、信使聘礼の改革を実施したが、かれの同門である雨森と松浦は『旧例』をもつてそれに反対し、けっきょく

その改革は一回だけで終わった。朝鮮との交隣外交（鎖国期日本の唯一の国交）において、当時徳川幕府から派遣された京都五山からの輪番僧にしても、また対馬藩の真文役にしても、当時日本における第一級の識者を対朝鮮外交の第一線である対馬に配置したことが知られる」（二七―八ページ）。

芳洲が朝鮮語を学び熟達したことにさきにわたくしは触れた。唐話を学んでいたかれが朝鮮語にも関心を向けたのは、対馬に赴任してからであるが、三五才のとき、対馬の宗義真^{よしざね}の再任を告げる告襲参判使の都船主（船团长、副使）としてかれが朝鮮にはじめて渡ったとき朝鮮語修得の必要を現地で痛感し、翌年早速機を得て釜山に赴き、その倭館にまる二年間逗留して、昼夜を問わずその学習に励んだ。「鎖国」の当時ゆえ、公的に朝鮮に「留学」するとは、かれにして初めて獲得することのできた好個の条件であつたろう。上垣外憲^{かみがいと}一は『雨森芳洲——元禄享保の国際人——』のなかで次のように書いている。「三六才のときから〔足掛け〕三年にわたった釜山滞在は、芳洲にとって実に貴重な、いや当時の日本の知識人にとってまったく稀有の異文化体験だった。……八〇才を越えた最晩年まで、芳洲の一生は不断の努力、学習の連続だったが、この時ほど緊張して勉強に打ち込んだことはなかったように思われる。外国にあって不断の刺激・摩擦を経験するという緊張のゆえだったろう。一民族の文化というものがどれほど巨大な重い歴史に根ざしたものであるかを、『命を五年縮め』るほどの『芳洲自身の語』苦しい言語の学習の中で芳洲は感じとっていったのである。」³⁶

釜山で芳洲は『交隣須知』など朝鮮語の学習書を作った。この書はその後改訂して長く使用され、明治初年に作られた学習書の原型をなしたといわれる。ハングルを覚えるためにかれは小説『淑香伝』『李白瓊伝』を写したりした。上垣外は次のようにいう、「言語の全体を学ぶとは、一民族の文化の総体を学ぶことに等しい。西班牙^{スペイン}とか常民といった朝鮮独特の身分制度、寒食・秋夕といった年中行事、食事の献立、女性の装身具、衣服冠婚葬祭、あらゆる事象において、日本にはないもの、日本とは違うものに出くわすことになる。こうして芳

洲は言語を学び朝鮮の風俗、習慣を知るにつけて、一民族の文化とは何か、その文化の根源とは何か、を問うようになつていくのである。⁹⁷

* 芳洲は、この頃朝鮮で出版された朝鮮語・日本語事典『倭語類解』の作成に協力したことが、朝鮮側の記録に残っており、芳洲の『交隣須知』には(残存している後代の写本によれば)、かれ自身かかわった『倭語類解』からの体裁上の影響がみられるとのことである。

以上、芳洲の生涯の一半と、業績のごく一端とについて瞥見した。じつはわたくしは、芳洲が白石とは一味違ったやはり当時を代表する「国際人」であることに関心をもち、ぜひ『交隣提醒』、『橘窓茶話』、『たはれぐさ』などを一読したいと思って、関西大学出版部刊『雨森芳洲全書』の借用を大阪経済法科大学図書館から関西大学図書館に、依頼したところ、それは筆写本のフォト版であり、わたくしは残念ながら読解の力を欠くために使用できなかった。それゆえ、テキストを読んで内容に立ちいることができず、以下、簡単に芳洲の思想ないし業績に触れるにとどめるほかはない。⁹⁸

芳洲は、朱子学派にぞくするが、徒らに形而上学的な論議に耽ることなく、かれの態度は一貫して実学的であり、交隣の折衝・実務のうえに儒学的素養をよく生かし、総じて儒学的合理主義、人道主義を経世のために適用することに努めたといえるだろう。具体的には、日朝双方の対立点などがしばしば出て困難な外交問題の処理に苦慮しなければならぬことがあったが、そのような場合にも、かれはこのような姿勢で解決に努力した。かれには、幕府、それに先輩の大儒、白石の意見がどうであれ、双方の立場を歴史的に、また現実的にみて、相対化してこれをとらえるだけの視野と器量があった。

芳洲には六一才のときの執筆になる『交隣提醒』がある。その内容は未見であるが、上野目出刀^{ひでと}によれば、次のような点ですぐれているようである。「三一才で朝鮮佐役に任ぜられて以来、三十年にわたる芳洲の外交

実務家としての体験、朝鮮事情、日朝交渉史の研究等、そのすべてがこの文章に結実している。……当時の対馬藩は、いわば日本の対韓外交を請負っていたのだから、この書は単に対馬藩の問題ではなく、十七、八世紀の日本の対韓国外交の実態を知るための貴重な書といえる。」その『交隣提醒』中に、日本側が朝鮮の慶賀使節を日光の東照寺に詣でさせ、廟制の華美を見せようとしたり、京都の方広寺で供応して、日本に珍しい大仏があることを知らせ、また武威を示そうとその耳塚をわざわざ見せようとすることに、芳洲が基本的に反対している箇所がある。上野日出刀が現代語に訳して引用しているところを次に借用しよう。「廟制は節儉を主といたしますので、その柱に丹をぬり、その垂木に彫刻をいたしますことは、『春秋』でも非難されておりまして、御廟制の華美を朝鮮の人が感心するはずありません。仏の功德は仏像の大小にはよりそうもないのに、有用の資材を費し、意味のない大仏をお作りになることは、これまたかれらのあざけります一端で、耳塚の方も、豊富秀吉が無名の戦を起こし、両国無数の人民を殺害されたことですから、それを見せるのは、その暴悪をかさねて話し出すようなものです。いずれもわが国威を輝かす助けにはなりません。かえってわが国の不学無職をあらわすだけでございます。」⁸⁹芳洲はこのような思想をもちながらも、幕府側の強引な態度のもとで、小藩たる対馬藩としては、日朝双方の間に入って外交的に事を計らねばならぬという難しい問題にもしばしば直面せざるをえなかった。

* 『広辞苑』によれば、「文録・慶長の役に、諸將が敵兵の耳（鼻とも伝える）を切り取り塩漬にして秀吉の検分に供したものを、埋めて供養したという」とある。じつに残忍至極なことである。江戸の世になってから朝鮮の使節にこの塚を見せようなどと考えていたとは、何とも驚いた料見である。

* 芳洲が幕府のことを「東藩」といつているのは興味ぶかい。かれは、幕府は「藩」であり、せいぜい武力的に諸藩を統轄している藩として理解しているのである。

上掲の引用文には、秀吉の朝鮮出兵を、一般的にいえば、武力の行使による制圧を非とする芳洲の思想が明確に述べられていると思う。戦争による無辜の民衆の蒙る惨禍をかれは深く憂えていた。土垣外憲一も、芳洲には「朝鮮出兵が道理のない戦さであり、それが両国の人民に多大な損害を与えたという基本認識がある」とする点で、その見解は、秀吉の朝鮮出兵への反省を欠く白石とは異なることを指摘し、『隣交始末物語』でも、「七ヶ年、両国の生霊専ら戦鬪を事とし、肝腦原野を塗し(悲惨きわまる死に方をし)、老弱餉饋に疲れ(食料が尽きて苦しみ)、残酷の災、誰か是を悲しまざるらん」と書いていることを、挙げている⁽⁶⁾。

芳洲は、江戸時代にあつて日本・朝鮮の三ヶ国語によく通じていた(学があり、また同時に語るといふ意味で)唯一の儒学者であり、それぞれの言語から文化の諸領域にわたる広い視点をもつことができた。これは相對主義的で多面的なものの見方でもあり、相互に寛容であろうと努めるかれの基本的な姿勢がここから生まれてくる。こうした姿勢をかれは、師の順庵から受けついたのであるが、対馬との折衝や交流を中心とする経験のなかで、いつそう豊かなものとして自分のものとすることができた。

かれが朱子学者として漢文・漢字を大切にすることは当然であつたが、当時日本のなかには仮名を厭い、いっそそんなものはなければよかった、そうすれば、漢字をもっとよく知ることができたのだから、などという人もいたようである。芳洲は『たはれぐさ』(和文の随筆)のなかでいう、「これは、おもはざることはなるべし」。どこの国でも、民族でも、自分の言葉とともに文字をもっている。「みなみなその国のことばに応じ、たれはじむともなく、をうな〔おみな〕、わらべ、下にまでこれをもちふ。まことに自然のことわりに出でたり。かなといふものなくばといへるは、其国々のことばなくばといへるにひとしかるべし。」もっとも、朝鮮のハングルは、一四四六年に李朝の世宗が公布した文字であり(かつては諺文と称した)、芳洲はもちろんこのことを知っていたであろうが、ともあれ、中国から西域、韃靼、欧米にいたるまでそれぞれの民族が自分の言葉と

文字をもつことは大切なことであり、しかもそこには「まことに自然のことわり」があるとしている。⁽⁹¹⁾ 前述したように、かれ自身ハングルの小説を筆写してその修得に努めている。スペインやポルトガルが一五世紀末から一六世紀にかけて中南米の原住民の言葉の圧殺と自国語の強要のもとに侵略的な経営を進めていたこと、そして、日本の明治政府が朝鮮支配のもとでの不当な言語的圧迫をおこなっていたこと、またソ連がたとえばモンゴル語の文字の使用を抑圧したことなど想起しただけでも、諸民族の言葉と文字を尊重する芳洲の視点の先駆的できわめて正しいことがわかる。⁽⁹²⁾ 芳洲は、日、中、鮮三ヶ国の言語の比較を試みたり、対馬で外国語の教育に努めるなど、言語とその教育に関心をもちつづけた。

(33) 伊豆公夫、同上書、二二〇ページ。

(34) 羽仁五郎『新井白石・福沢諭吉』岩波書店、一九三七年、一九九―二〇〇ページ。

(35) 谷義彦「新井白石とその歴史研究」『世界文化』一九三五年、六―七月、伊豆公夫『新版日本史学史』校倉書房、一九七二年、および羽仁、前掲書に多くを負うている。

(36) 『論語』「為政」篇に、「子曰、多聞闕^レ疑、慎言^レ其余、則寡^レ尤^{（よめ）}。多見闕^レ殆^{（あや）}、慎行^レ其余、則寡^レ悔」とある。

(37) 新井白石『古史通』『新井白石全集』第三巻、一九〇六年、二二二ページ。

(38) 同上書、二一九ページ。

(39) 同上書、二二六ページ。

(40) 谷義彦、前掲論文、前掲誌、七月号。

(41) 同上論文より借用。

(42) 大久保正『江戸時代の国学』至文堂、一九六三年、四ページ。

(43) 新井白石『古史通』前掲書、二二五ページ。

(44) 丸括弧内のページ付けについては、白石についての上掲拙稿、注(13)を参照。

(45) 『古史通』前掲書、二二六ページ。

- (46) 「白石先生手簡」、前掲書、五一八―一九ページ。
- (47) 同上書、五三六ページ。
- (48) 同上書、五三六ページ。
- (49) 伊豆君夫、前掲『新版日本史学史』一三九ページ。
- (50) 江戸城内紅葉山にある幕府の書庫をいう。家康の創設に成るものを家光がここに移した。
- (51) 拙著『日本思想史序説』二三三―四ページ。
- (52) 同上書、同ページ。
- (53) 伊豆公夫、前掲『新版日本史学史』一四〇ページ。
- (54) 同上書、一四七ページ。
- (55) 同上書、一五〇ページ。
- (56) 上垣外憲一『雨森芳洲——元禄享保の国際人——』中公新書、一九八九年、九五―六ページ。
- (57) 同上書、一〇〇ページ。
- (58) この付論は、上垣内、同上書と、上野日出刀「雨森芳洲」、日本の思想家『木下順庵・雨森芳洲』一九八八年、明徳出版社とに負う。
- (59) 上野日出刀、前掲書、二〇二ページ。
- (60) 上垣外憲一、前掲書、一三一ページ。
- (61) 上野日出刀、前掲書、一六〇―一六二ページ。
- (62) 各民族は歴史的・伝統的にそれぞれの言語と文字を大切にしなければならない。また相互に他の民族の言語と文字を尊重しなければならない。

